

立正大学古書資料館蔵  
奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

伊藤 善隆



シリーズ・アタラクシア vol. 6

立正大学古書資料館蔵  
奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

【目次】

冊子本『太しよくはん』下巻影印	1
巻子本『太しよくわん』下巻影印	45
立正大学古書資料館蔵『大織冠』冊子本（下巻）翻刻・注・校異	61
あとがき	72

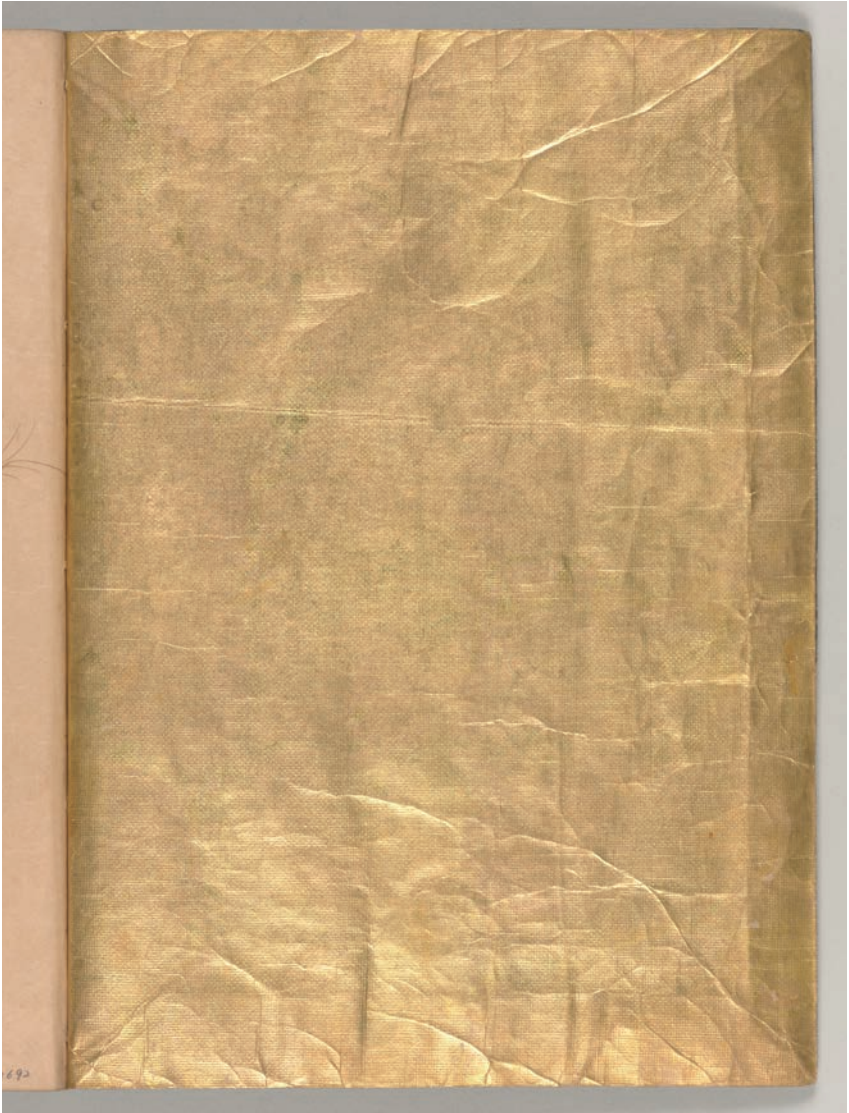


冊子本『太しよくはん』下巻影印





(下巻表紙)



(下巻表紙見返し)

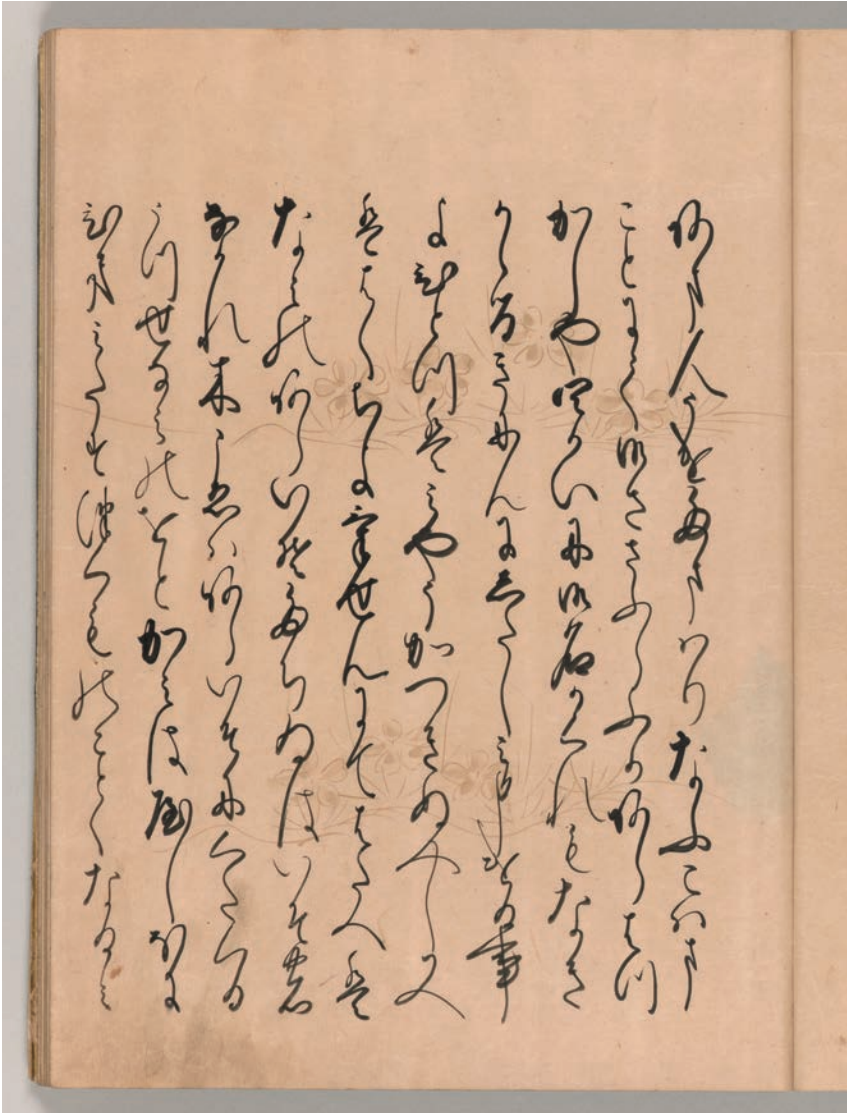


(遊紙才)

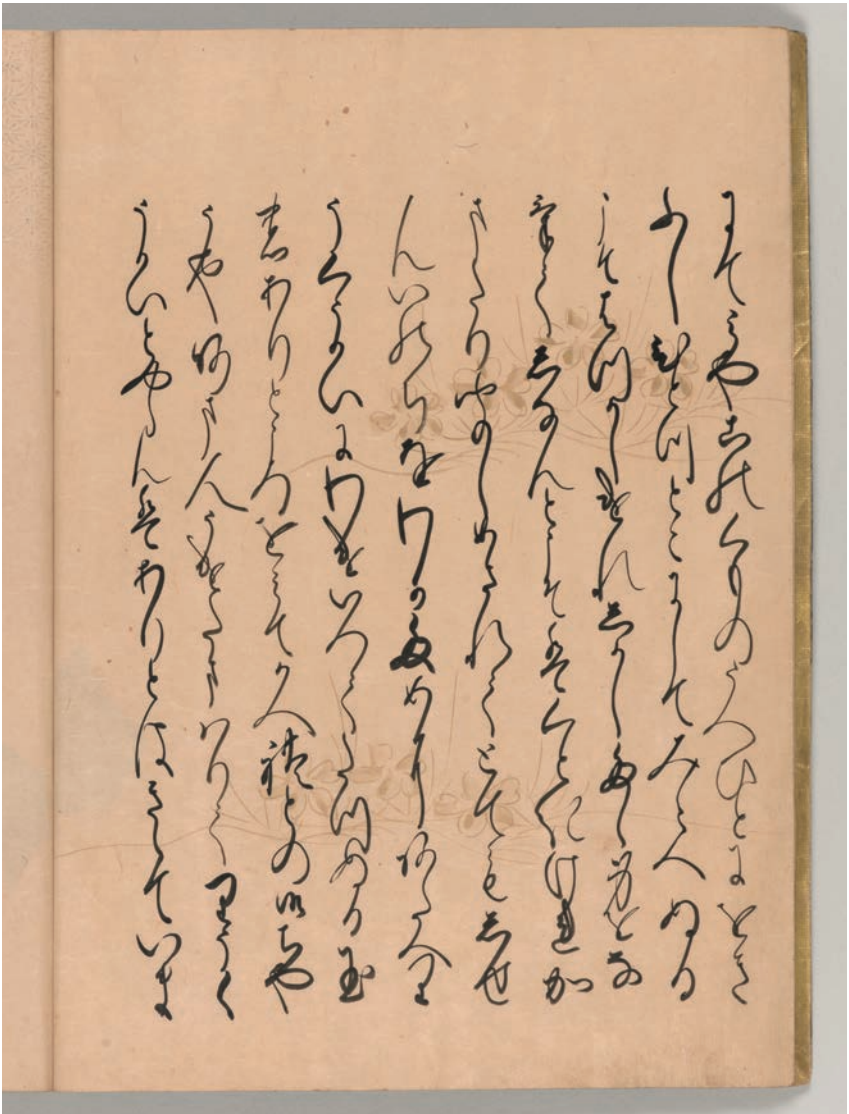




(遊紙ウ)

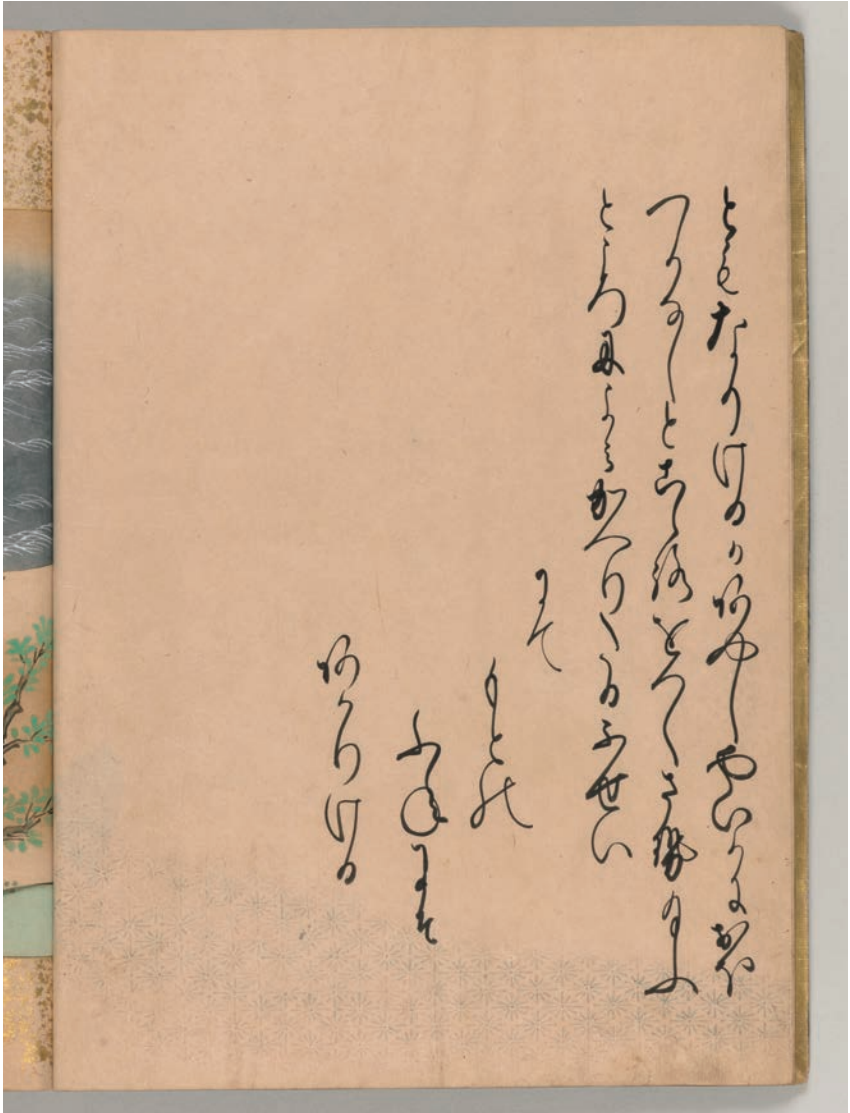


(一才)



(一ウ)





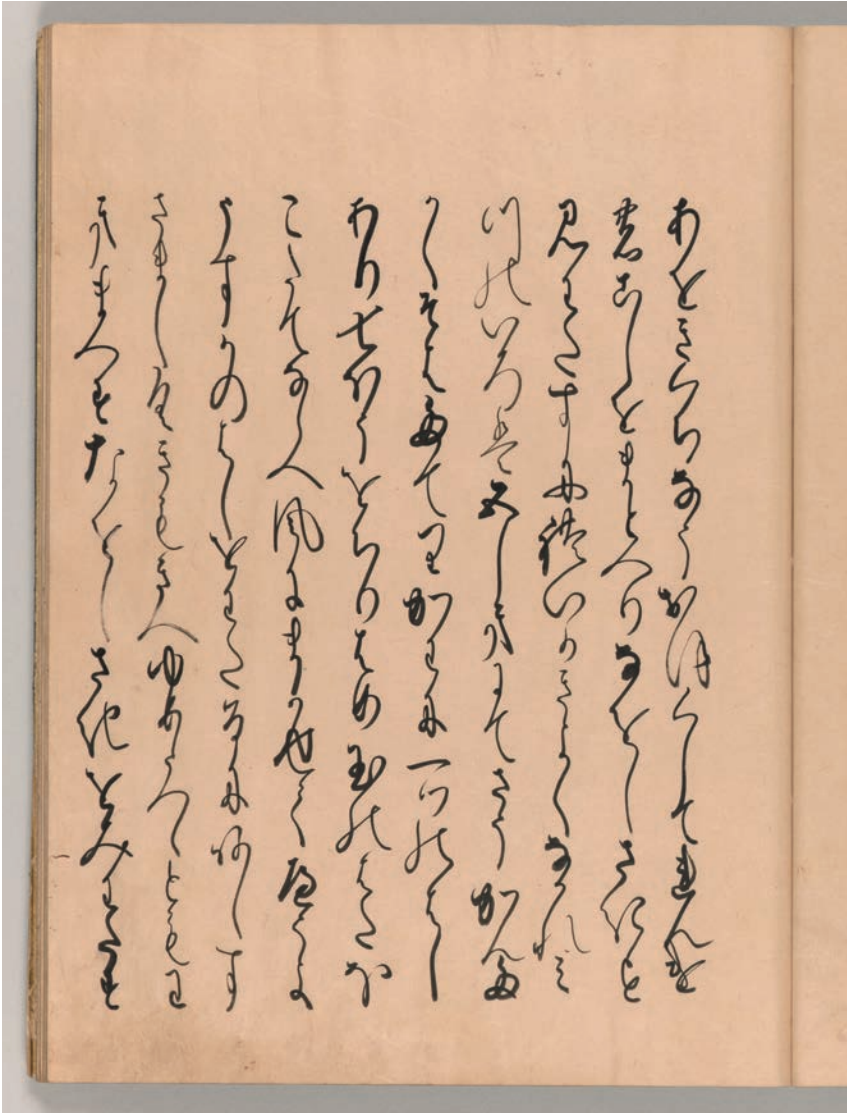
(二ウ)



(三才)

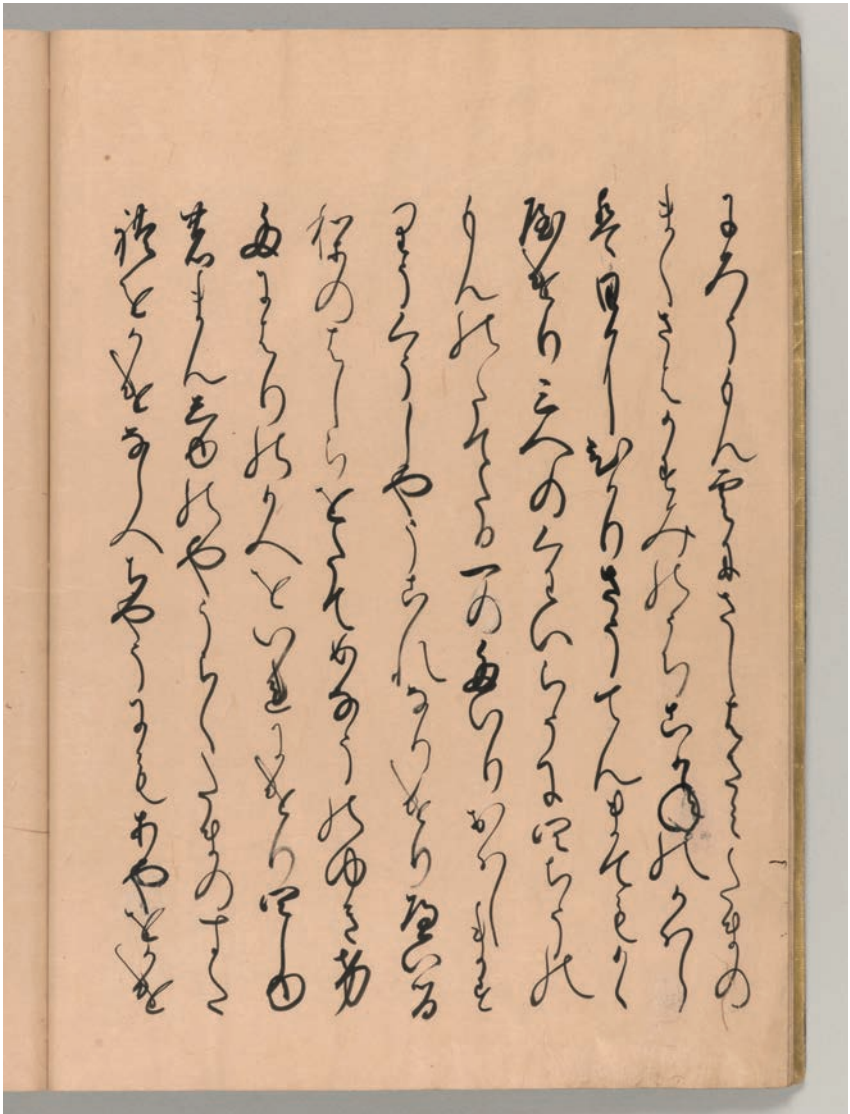
何うもことごとく御行入と云ふは  
とゞき御座り候へども御座り候  
たゞ心もあらつと云ふは御座り候  
みらまも御座り候と云ふは御座り候  
御座り候と云ふは御座り候と云ふは  
と云ふは御座り候と云ふは御座り候  
御座り候と云ふは御座り候と云ふは  
御座り候と云ふは御座り候と云ふは  
御座り候と云ふは御座り候と云ふは  
御座り候と云ふは御座り候と云ふは

(三ウ)

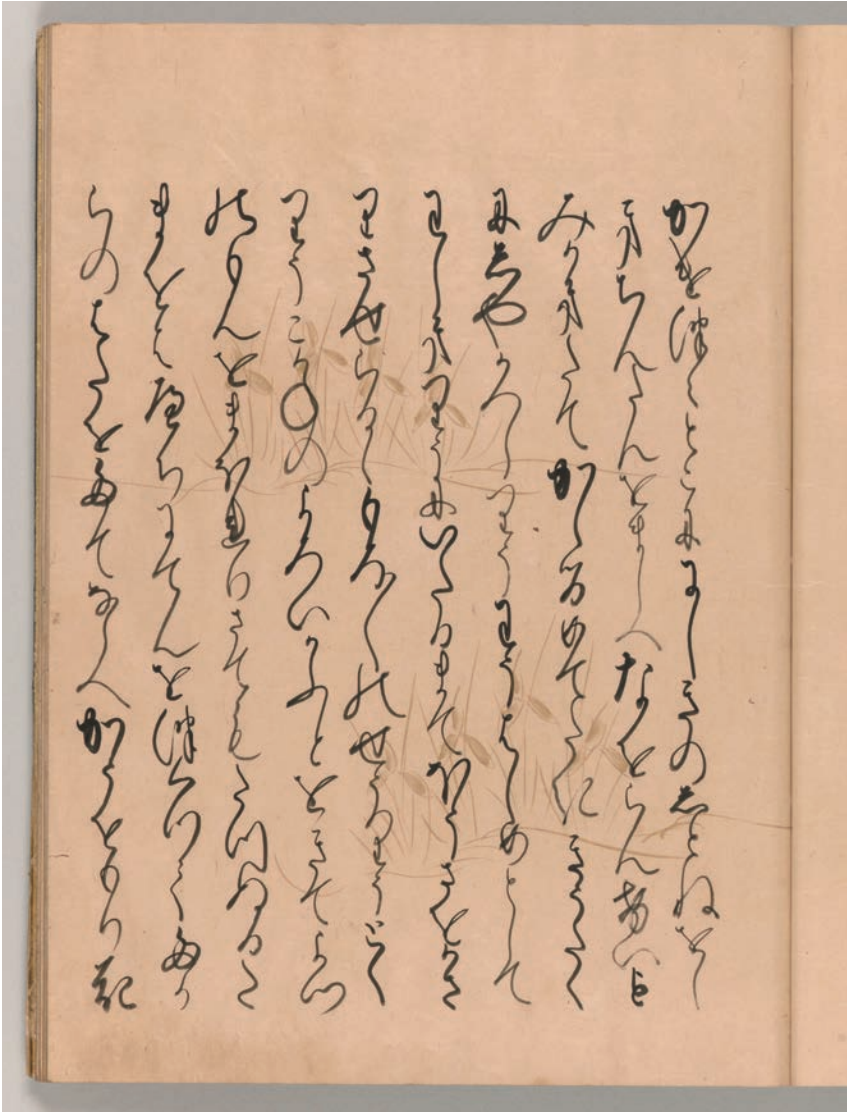


(四才)

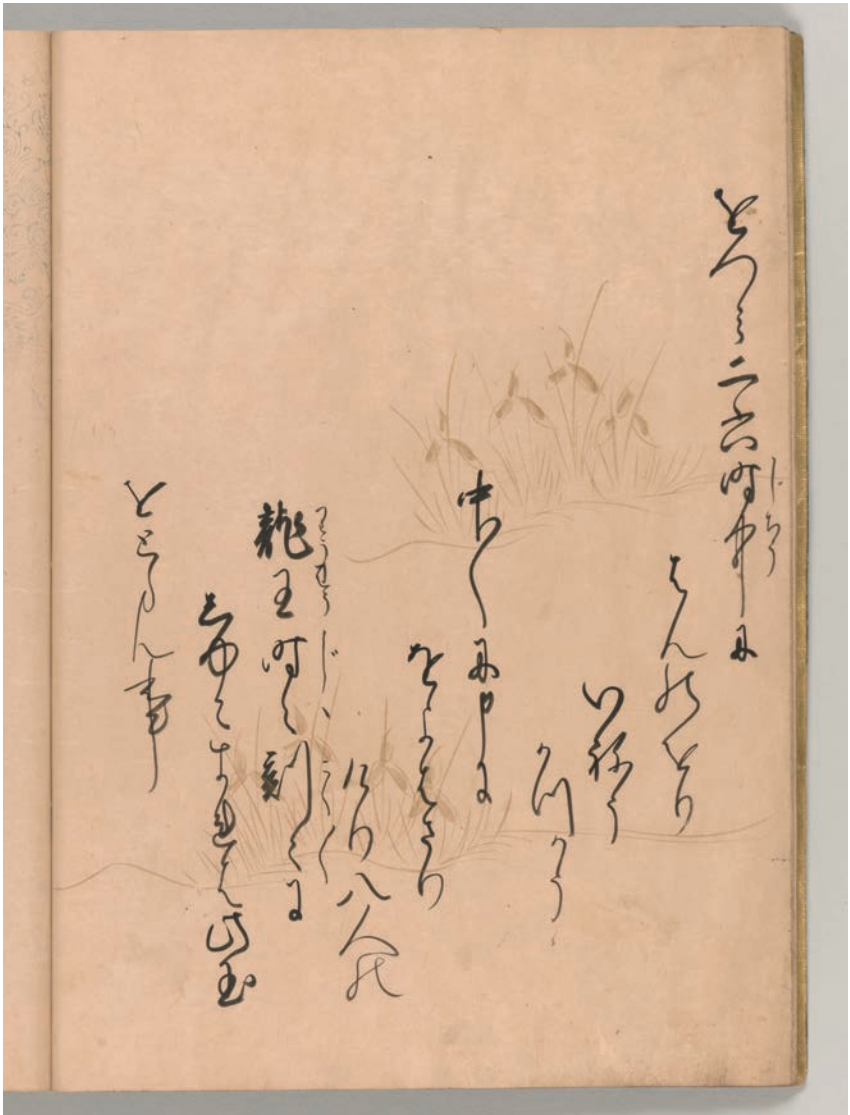




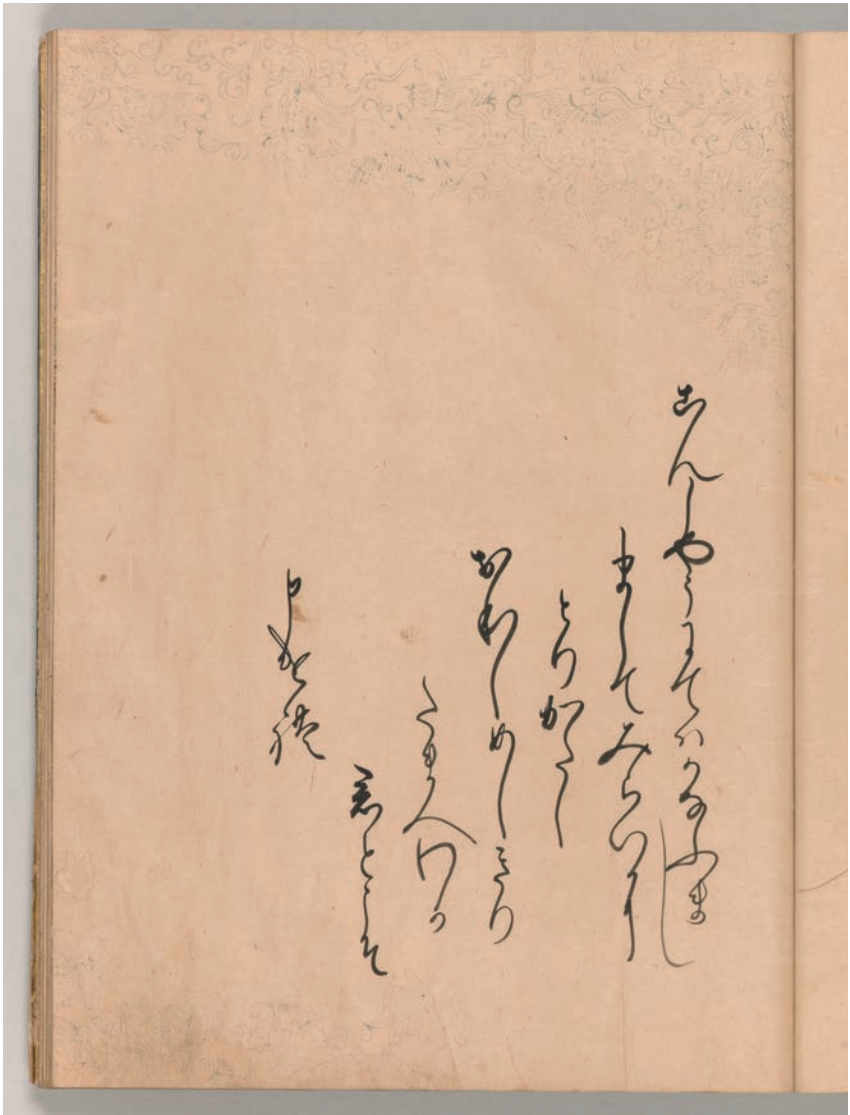
(四ウ)



(五才)



(五ウ)



(六才)

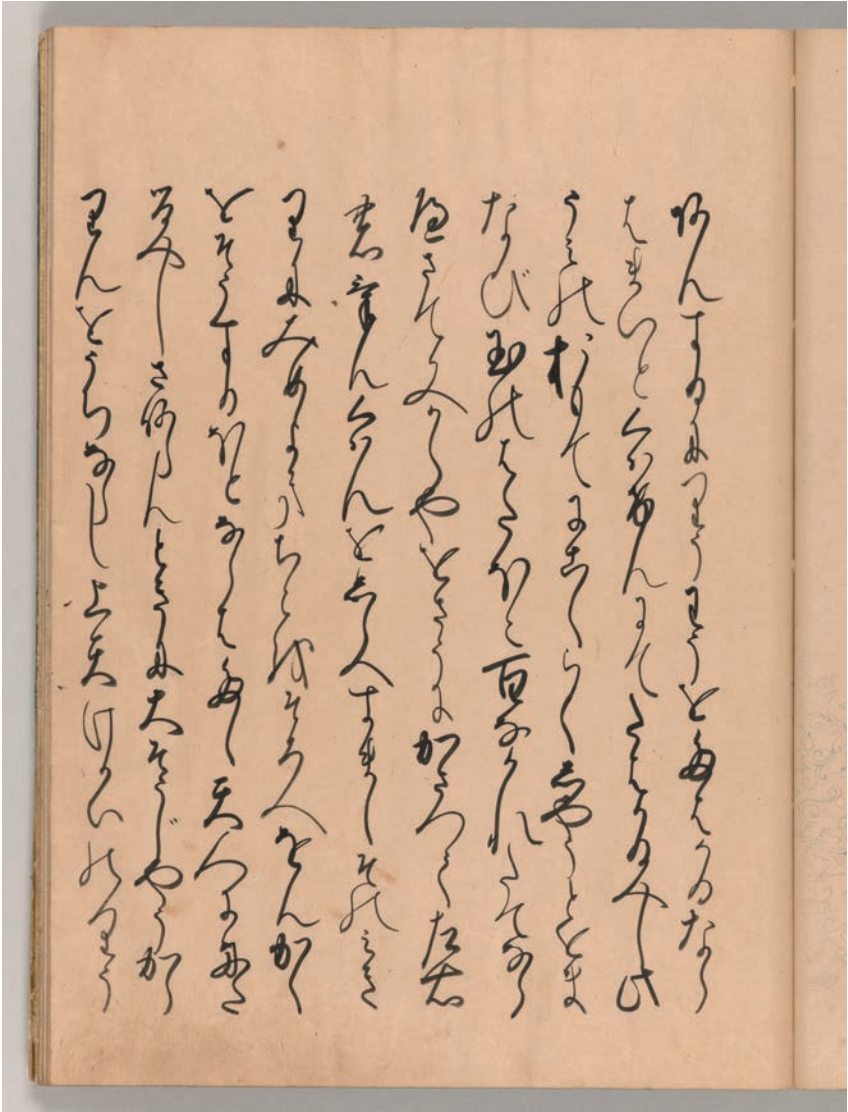


(六ウ)



(七才)





(八才)

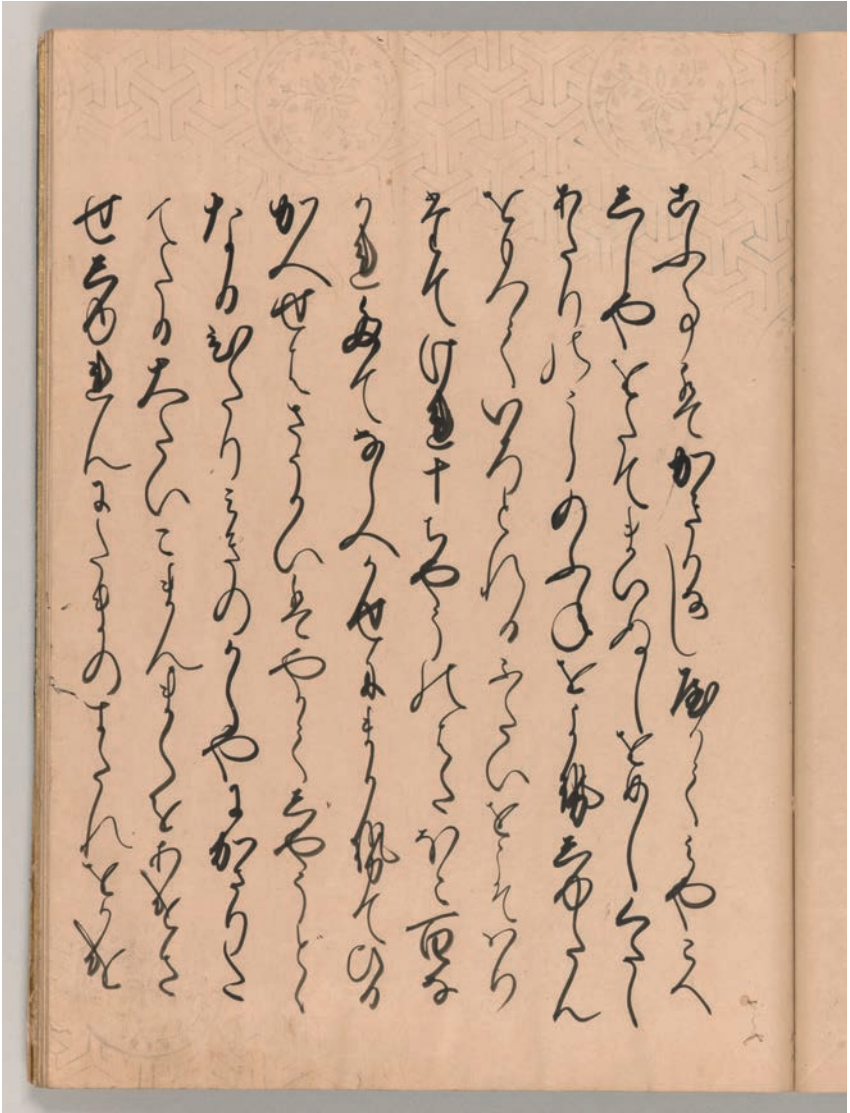


らんごのうしらんもさうさうの  
しんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの  
らんごのうしらんもさうさうの

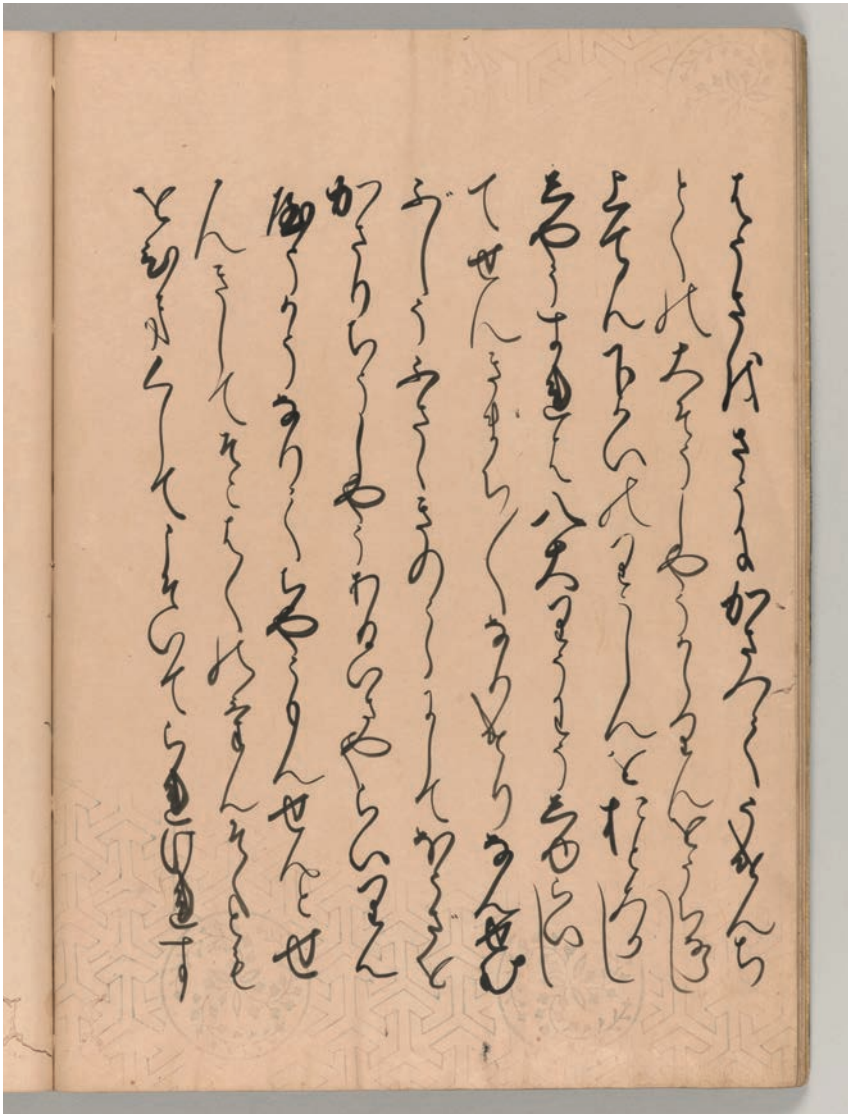
(八ウ)



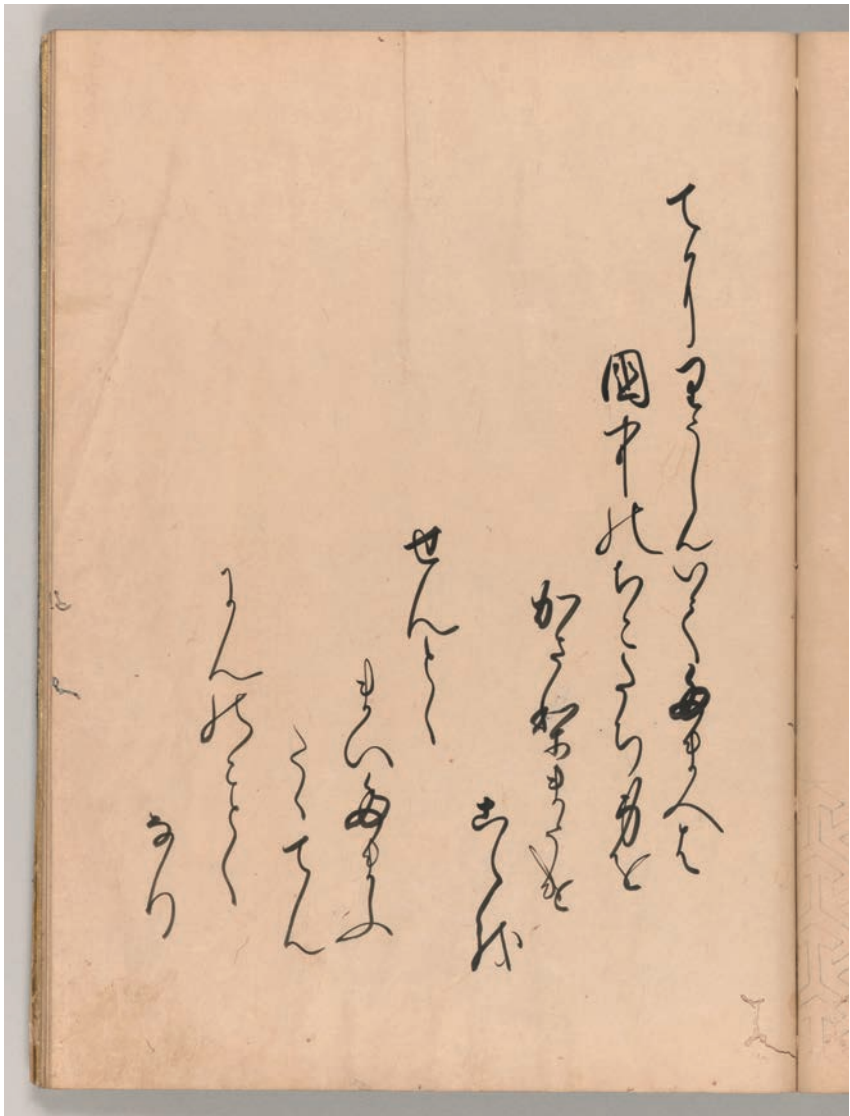




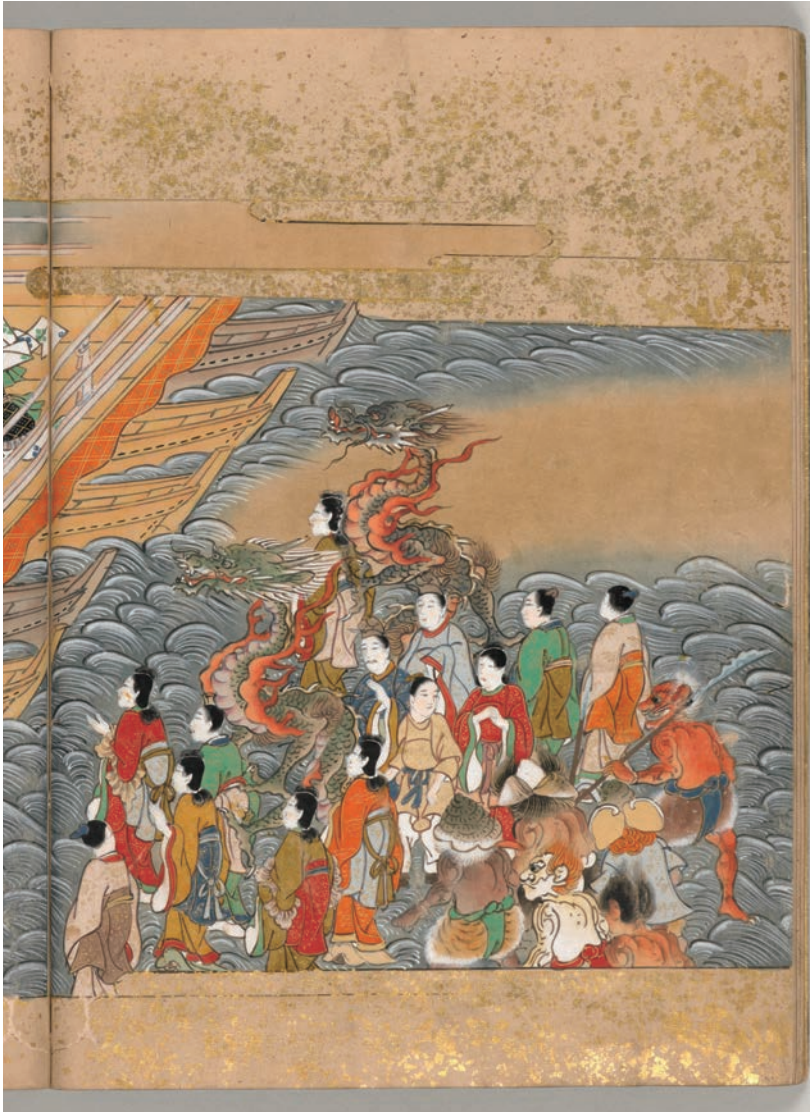
(一〇オ)



(一〇ウ)



(一一才)



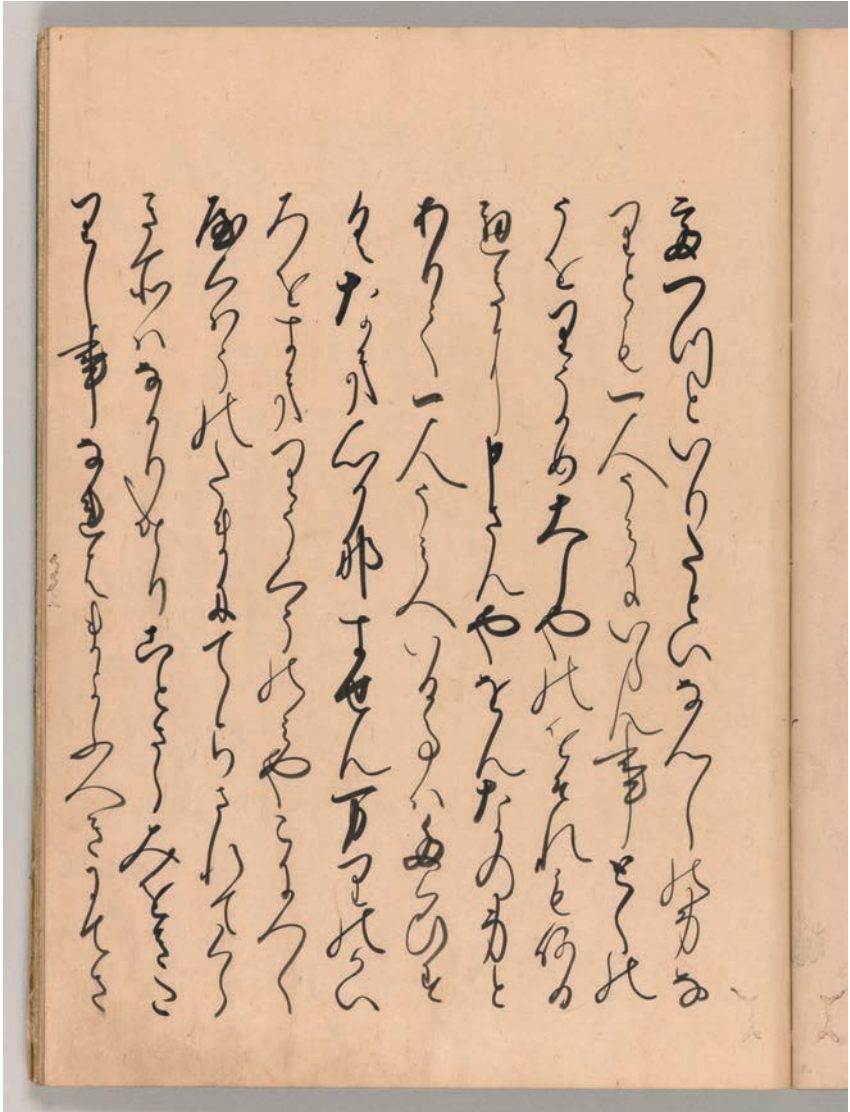
(一一ウ)



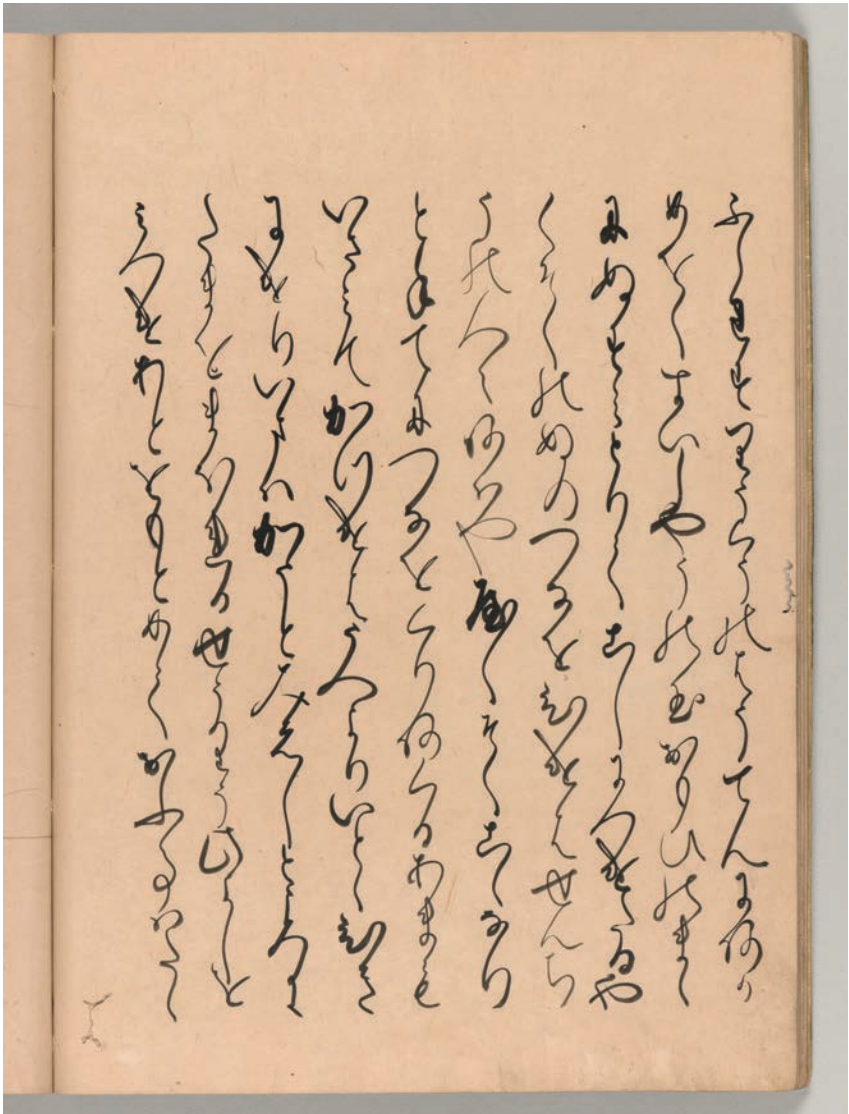
(一二オ)



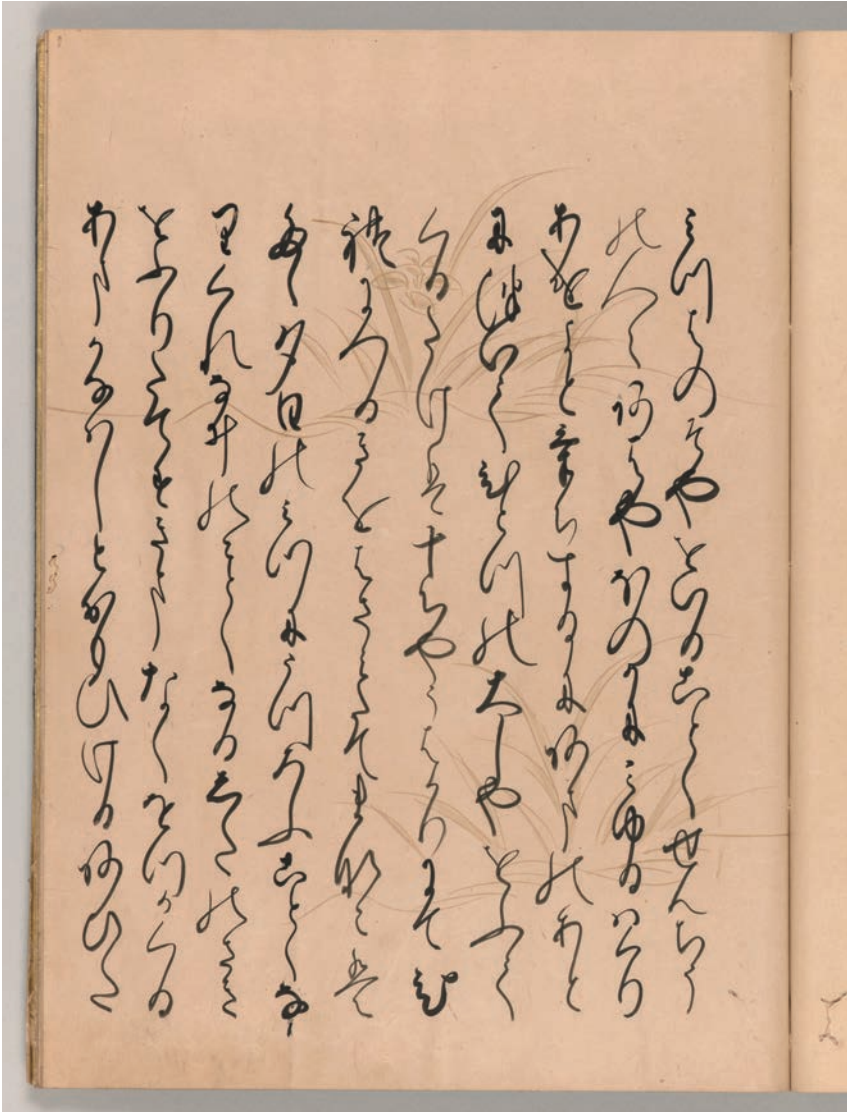




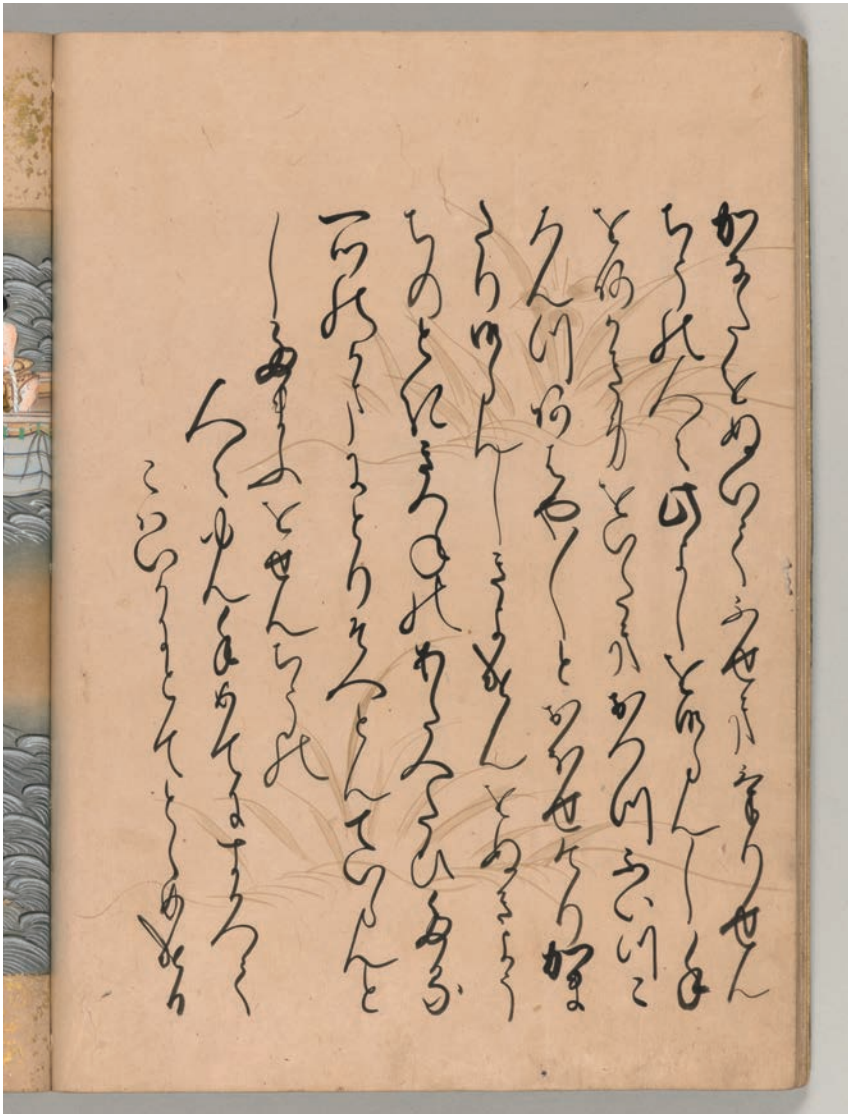
(一三才)



(一三ウ)



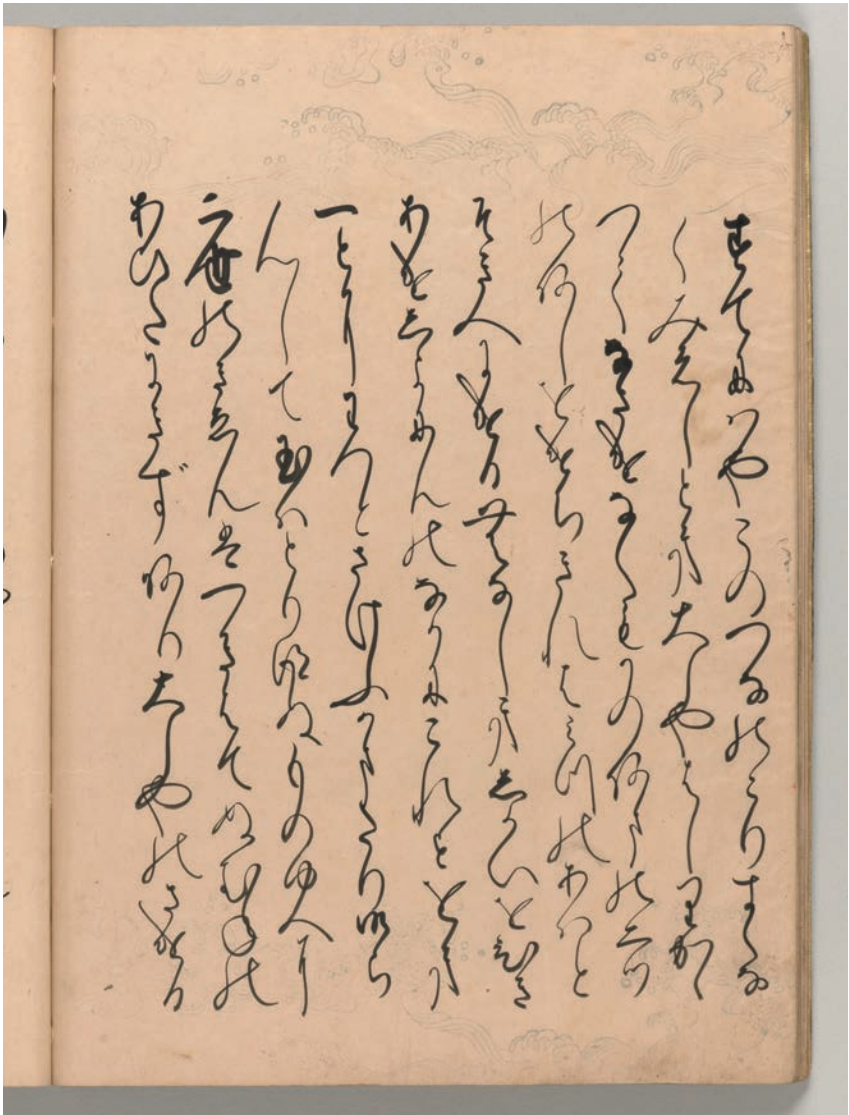
(一四才)



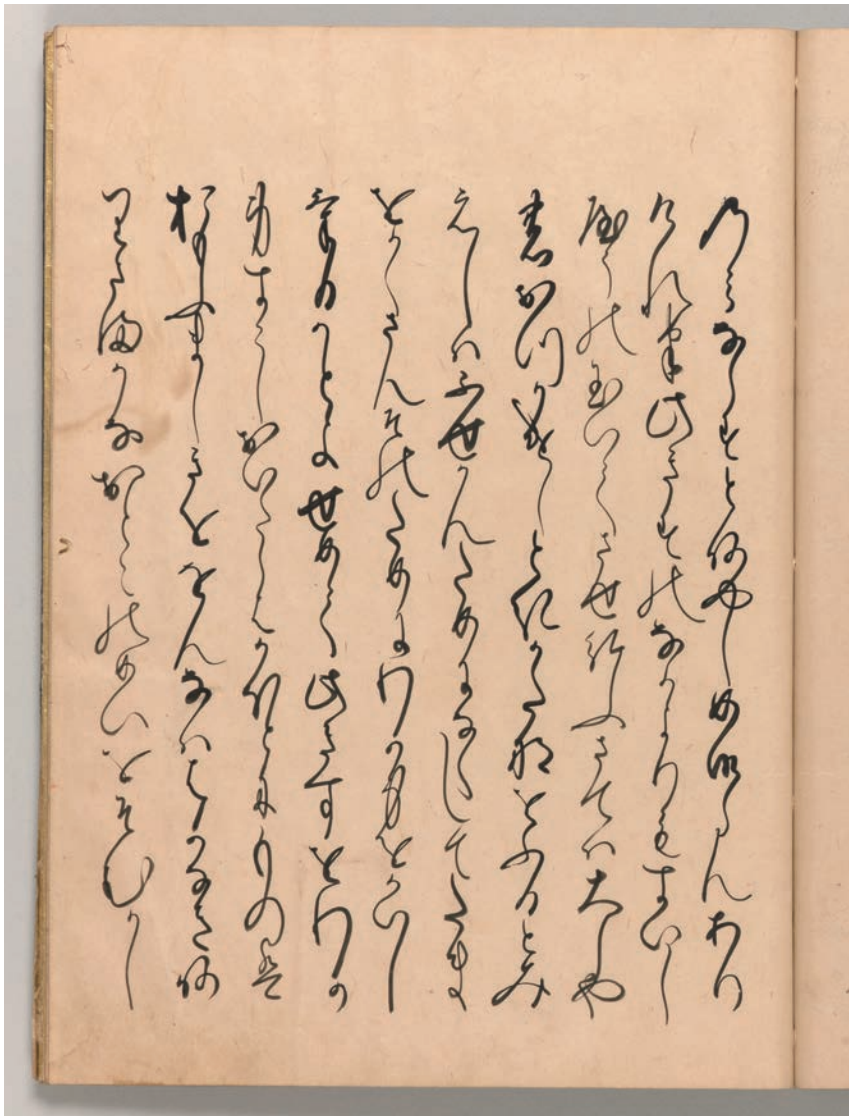
(一四ウ)



(一五才)



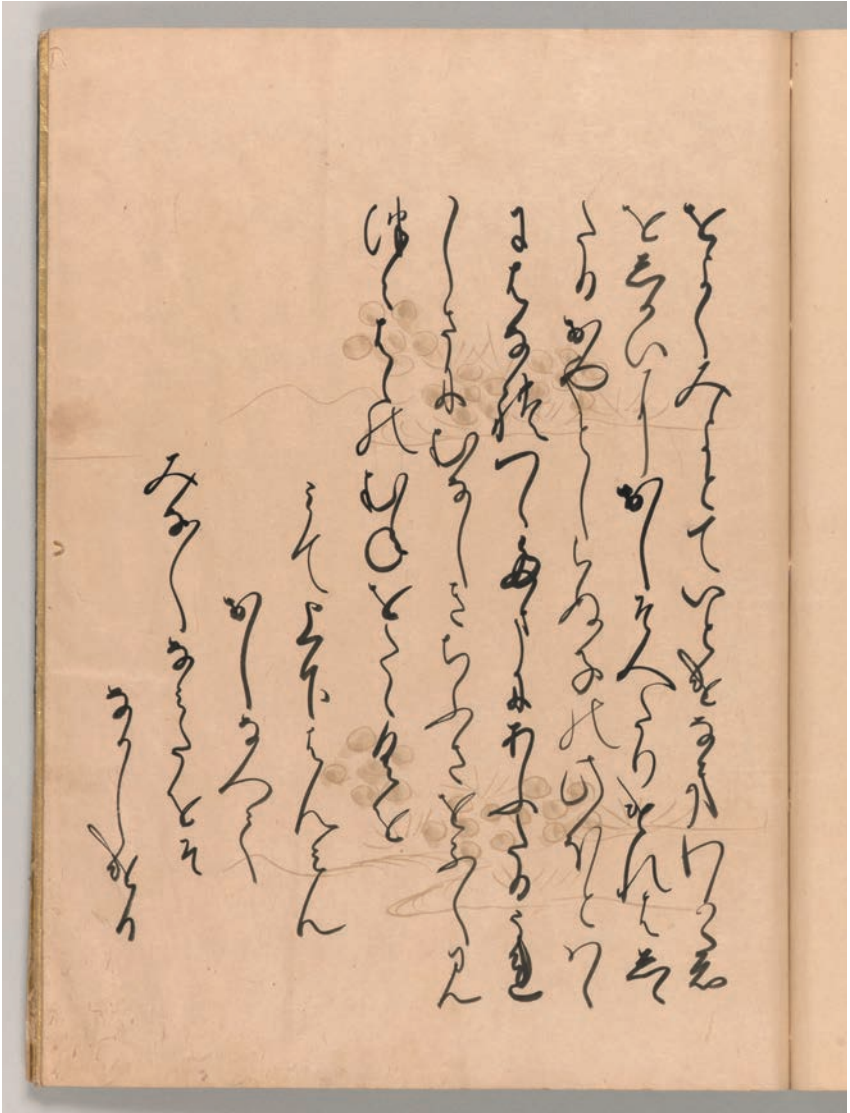
(一五ウ)



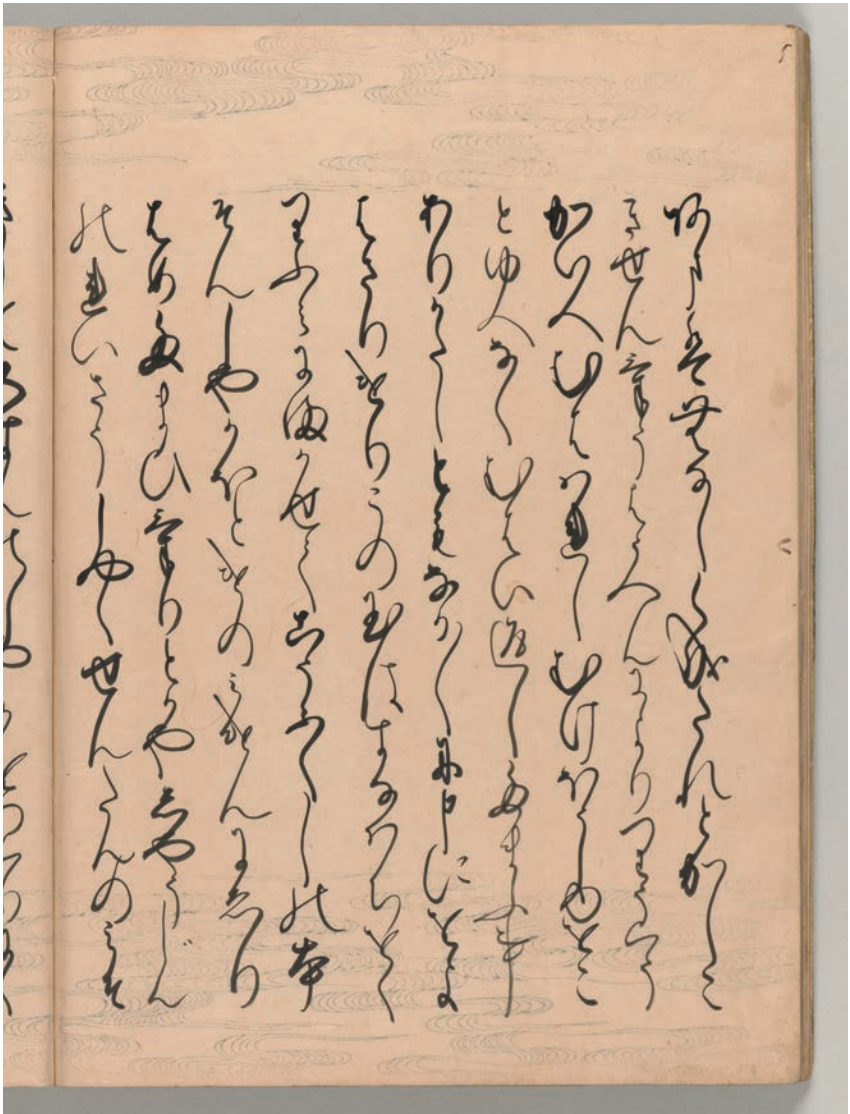
(一六才)





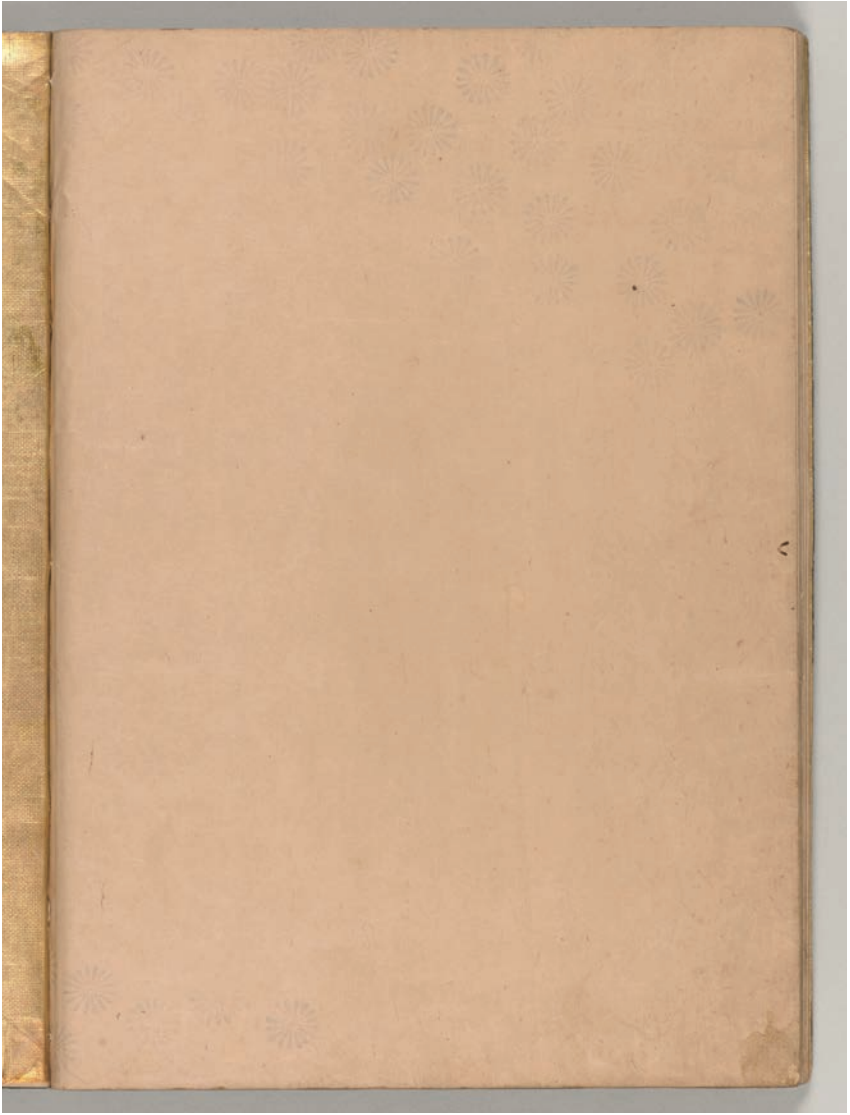


(一七才)



(一七ウ)





(一八ウ)



(下巻裏表紙見返し)

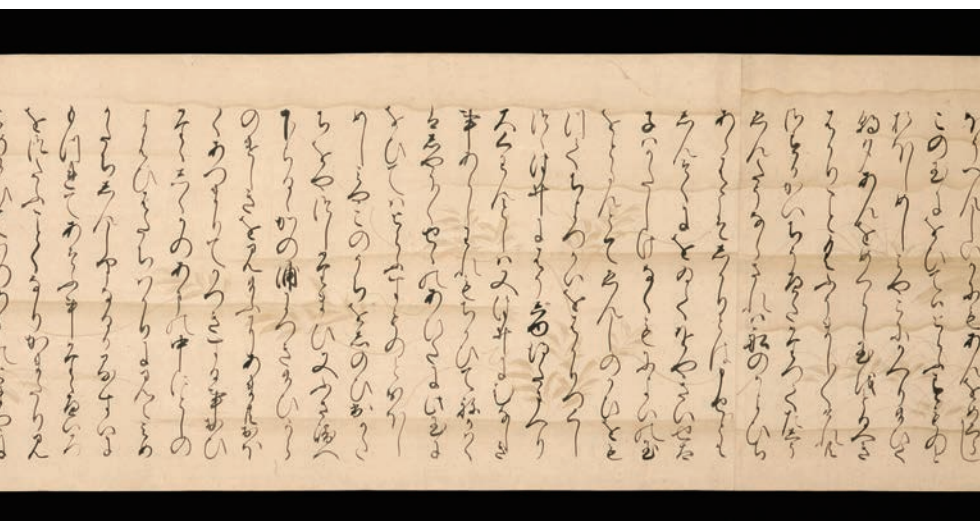


(下巻裏表紙)

卷子本『太しよくわん』下巻影印















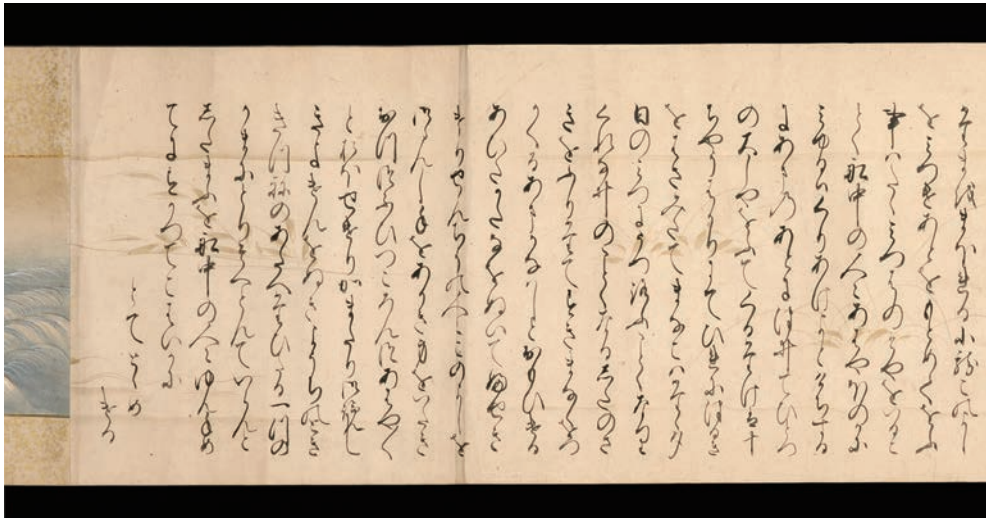


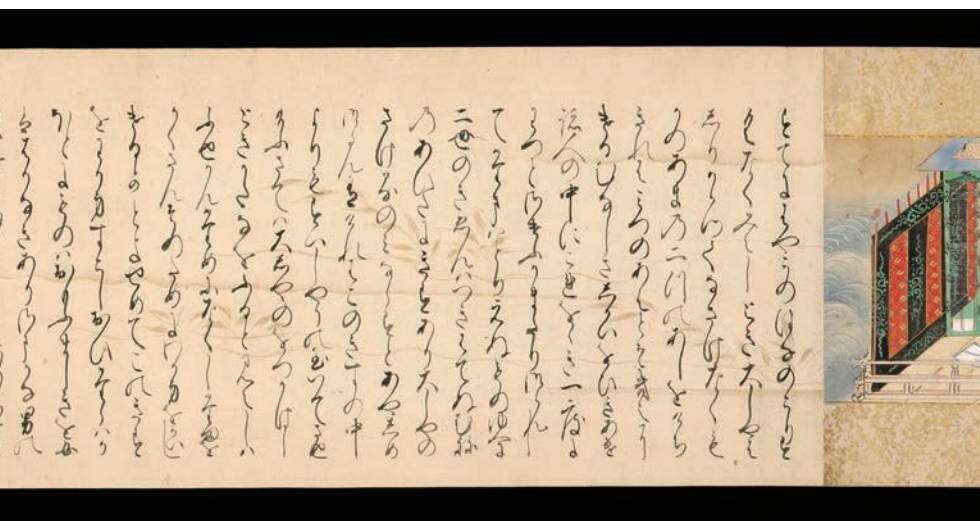


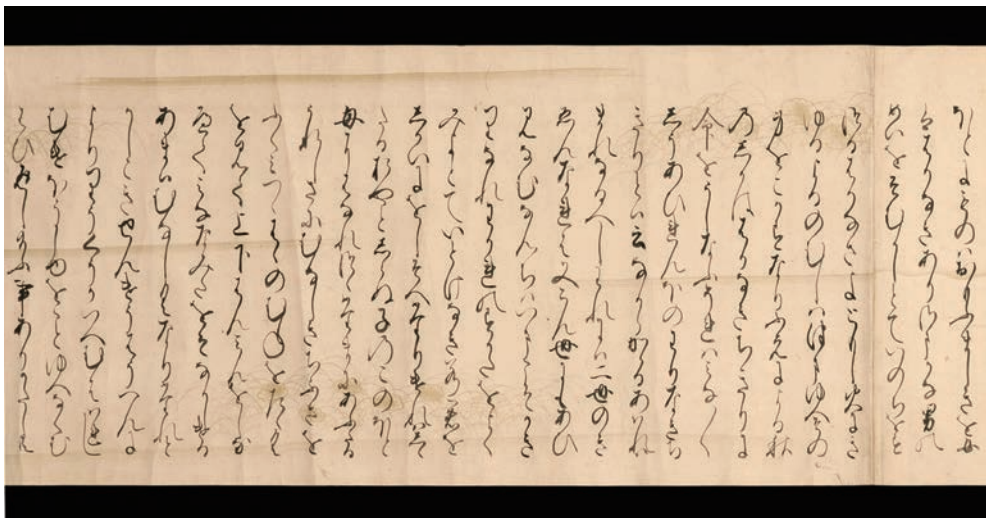


















立正大学古書資料館蔵『大織冠』

冊子本（下巻）翻刻・注・校異



立正大学古書資料館蔵

『大織冠』冊子本（下巻）翻刻・注・校異

※冊子本と卷子本の書誌と、翻刻・注・校異の凡例は、  
本書上巻に掲載。

〈冊子本翻刻〉

太しよくはん 下

あま<sup>海女</sup>人うけたまはり、なふ、こはま<sup>真</sup>

ことにて御<sup>座</sup>ささふらふか。あらはつ<sup>恥</sup>

かしや。四<sup>海</sup>かいに御名かくれもなき、

かゝるきにん<sup>貴人</sup>にしたししみ申ける事

よ。ひと<sup>一</sup>つはみやうかつきぬへし。又

は、はく<sup>白</sup>ちよ<sup>女</sup>けせんにて、はたへは

な<sup>波</sup>みのあらいそ、たち<sup>立</sup>あはいその

な<sup>流</sup>かれ木、こ<sup>声</sup>ゑはあらいそにくたくる

う<sup>打</sup>つせなみのを<sup>音</sup>と、か<sup>髪</sup>みはやしほ<sup>八</sup>に

ひ<sup>引</sup>き<sup>乱</sup>みたす<sup>江浦草</sup>つものことくなる<sup>身</sup>み

にて、みや<sup>都</sup>このくものうへ<sup>上</sup>ひと<sup>人</sup>に、を<sup>起</sup>き

「（題簽）

「（二オ）

ふし<sup>伏</sup>ひとつとこにして、み<sup>見</sup>へぬる

こそは<sup>恥</sup>つかしけれ。しかし、たゝ<sup>口説</sup>身をな

けてし<sup>死</sup>なんとこそはくと<sup>口説</sup>きけれ。か<sup>兼</sup>

またり<sup>足</sup>聞しめされて、とてもし<sup>死</sup>せ

んいのちを、わ<sup>我</sup>かた<sup>命</sup>めにあたへ、り<sup>電</sup>

う<sup>宮</sup>くうかいに<sup>界</sup>わけ<sup>分</sup>い<sup>入</sup>つて、た<sup>尋</sup>つぬる玉

の<sup>有</sup>ありと<sup>所</sup>ころを<sup>見</sup>みてか<sup>福</sup>へれとの御<sup>詔</sup>ちや

う<sup>海女</sup>也。あま<sup>承</sup>人うけたまはりて、り<sup>電</sup>う<sup>宮</sup>

うかいとやらんは、ありとは<sup>聞</sup>きゝていま

た<sup>見</sup>みす。ゆ<sup>行</sup>きてか<sup>福</sup>へらん事、か<sup>兼</sup>たか

るへし。たとひいかなるおほ<sup>仰</sup>せなり

とも、いかてかそむ<sup>背</sup>き申へきと、か<sup>兼</sup>ま

たりにいとまをこ<sup>暇</sup>い、一<sup>葉</sup>ようのふ<sup>舟</sup>ねに

さ<sup>棹</sup>ほをさし、お<sup>沖</sup>きをさ<sup>指</sup>してこ<sup>漕</sup>きいて、

な<sup>波</sup>み<sup>間</sup>まをわ<sup>分</sup>けてつ<sup>入</sup>つとい<sup>入</sup>り、一日に

も<sup>上</sup>あからす、二<sup>上</sup>日にもあからす、三日、

四<sup>過</sup>日もはやすきて、七日にこそなりに

けれ。か<sup>兼</sup>またり<sup>足</sup>おほ<sup>仰</sup>せけるやうは、あ

ら<sup>無</sup>む<sup>残</sup>さんや、か<sup>彼</sup>のものは、う<sup>魚</sup>をの<sup>餌</sup>ゑし<sup>食</sup>き

「（二ウ）

「（二オ）

ともなりけるか。あやし怪や、いかに、おほ  
つかなしと、ころをつく心させ給ふ  
ところ所に、よみか蘇へりたるふせい風情

にて、

元  
もとの

舟  
ふねにそ

上  
あかりける。

(第十二回 海女と語らう大織冠)

いかにととはせ給へは、しはしは物  
を申さず、やゝありて申けるは、  
なふ、此とよりうくうかいへゆく土 竜 宮 界 行  
みちは、事もな斜めの事ならず。  
ひとつのかしらをさきとして、くらき一 頭 先 暗  
ところをまほつて、ちいろのそこへわけ所 千 尋 底 分  
いるに、うしほ潮のるす流いつきぬれは、く入 水 尽 紅  
れなみのいろのみつ色 水そある。なをし  
そこへわけ底 分 入 入 黄 金 浜 派いるに、こかねのはま地に

「(二ウ)

「(三オ)

おち落つ着く。五しきのれん色けをいふし、  
あ青をきくち蛇なうおほくして、れん通 華け  
のこし腰をま繼とへり。なをし先さきを  
見わたすに、れいか麗 河 清きよくなかれ、み渡 流 水  
つのいろは五しき色にて、さうかんた双 岸 高  
かくそはたてり。かわ時 河に一つのはし  
あり。七ほう宝 鐘をちりはめ、玉のはたほ幡 輪  
こたてならへ、風任にまかせてへうよ飄 揺  
うす。かのはし橋をわたるに、あし足す  
さましく、き肝 消もきへ、ゆめ夢う現つ舟ともわ  
きまへす、なをし先さきをみわたす  
に、ろう樓もん門雲にさしはさみ、たまの玉  
まく榻さはかすみのうち、こかね黄 金 瓦のかはら  
は日光にひかり、さう著 天てん廊まてもか輝  
やけり。三へのくわ廻 廊いらうに、四ち重うの  
もん門 立のたてたる、一のたいり内 裏おはします。  
り電 宮う城しやう、これなりけり。へ吹 溜いろ  
り璃 柱 立 瑪 瑙 行 術のはし種ら入をたて、め入なうのゆ種きけ  
たに、はり玻 璃 壁 入のかへをいれにけり。四し種ゆ

「(三ウ)

「(四オ)

のまんしゆ満珠のやうらく瓔珞、たま玉のすた簾  
れを掛かけならへ並、ちやう帳にもあや綾を掛かけつゝ床、とこ綿に掛しきのし敷とね敷をし敷  
き、ちんたん沈檀を交ましへ交、なをらんけい鸞鏡を  
みか磨きたて立て、か目ゝるめ出度てた宮きさ宅うたく  
に沙、し沙やか端つら羅りう電わ王は始しめ始として、  
わ和し修き吉りう電に至いた至るま宝て、ほ宝う座さを飾かさ飾  
り座、させ座ら座るゝ諸。も々ろ々く々の小せ毒う毒りう毒、と毒く  
りう電、こ黄かね金の璽よろ甲い甲か着ふ着と着を着きて着、よ四つ  
の門もん守を守ま守ほ守れり守。さ規ても尋た尋つ尋ぬ尋る玉た玉  
ま別を殿は殿、へ殿ち殿にて殿ん殿を殿つ殿く殿つ殿て殿、た宝か宝  
ら桶のは立た並を並た並て並なら並へ並、か香う盛を盛も盛り盛、花盛  
をつ摘み中、二じ六ち時中に中

「(四ウ)

は番ん居の居を居り居、  
い曲ね繞う繞  
か渴つ仰かう仰  
中中く中に中、申申に申  
を及よ及は及さり及  
け八り八。八八人八の八

「(五オ)

(第十三回) 竜宮の情景

竜王りゅうわう、時々じ、ときとき刻々くくにに

しゆ守こ護す護れば護、此此玉玉

をと取らん取事事、  
「(五ウ)

今今し生やう生にて生は生かな叶ふ叶まし叶し叶。

未未ま来して来み来ら来い来に来

取取と取り取か取た取し取。

思思ほ思し思め思し思き思り思

給給たま我へ我、わ我か我

君君と君こそ君

申申けれ申。

「(六オ)

「(六ウ)

「(七オ)

鎌鎌足足たり足、き開こ召し召め召され召て召、さ玉て玉は玉、た玉  
ま有の有あり有と有ころ有を有、た見し見か見に見み見を見き見つ見る見  
物有かな有。あり有と有た有にも有お有も有ひ有な有は有、と取り取え取  
ん決事定は定け定つ定ち定や定う定なり定。り電う電と電も電も電、は謀  
か取り取事取を取め取く取ら取し取、た取は取か取つ取て取と取り取た取れ取は取、  
わ我れ我も我た巧く巧み巧を巧め巧く巧ら巧し巧、た謀は謀か謀つ謀て謀と謀り謀た謀れ謀は謀、  
わ我れ我も我た巧く巧み巧を巧め巧く巧ら巧し巧、た謀は謀か謀つ謀て謀と謀り謀た謀れ謀は謀、

るへきなり。それりうしんと申は、五すい  
さんねつひまもなく、くるしみおほき御  
身なり。此くるしみをまぬかる事は、しら  
へのを<sup>音</sup>とによもしかし。こゝをもつて

「(七ウ)

あんするに、りうわうをたはかるなら  
は、まいとくはけんにてたはかるへし。此  
うみのおもてに、こくらくしやうとをま  
なび、玉のはたほこ、百なかれたてなら  
へ、さて又、かくやをさうにかきつて、左右

のけんくはんをしらへすまし、そのみき  
りに、みめよきちこをそろへ、をんかく  
をそうするほとならは、たゝ天人ににた  
るへし。さあらんときに、大そうじやう、から  
りんをうちならし、上天けかいのりう  
しんをおとろかし、くはんしやうするなら

「(八オ)

は、すゝめによつてかみほとけのそみ、らい  
りんましまさは、りうくうのみやこよ  
り、八大りうくうをさきとして、そこはこ  
のけんそくともをひきくしていてら

るへし。そのあひたは、りうくうかいに竜  
一人もあるましきそ。入すのあひたを  
うかかつて、そろりといりてぬすみとつ  
て、やああたへかしとそ、おほせける。あま

「(八ウ)

人うけたまはり、あらゆゝしのきみの  
御たくみやさふらふ。かゝるせんけう  
なくしては、いかてたやすくとりえ  
なん。たゝし、るすの間なりとも、玉の  
けいこはあるへし。たといむなく  
なるとも、玉にをひてはしさいなく  
とりあげ、君にまいらすへきか、もし

「(九オ)

もむなくなるならは、またたら  
ちうのみとり子の、ちふさはなるゝ  
事もなし。君ならては、のちの世  
をあはれむ人のあるへきかとして、なく  
よりほかの事はなし。かまたりきこ  
しめされて、心やすくおもへ。もしも  
むなしくなるならは、けうやうの  
そのために、ならのみやこに大からん

を建立こ入りうすへし。又、此わか若かにい

ては、いまた幼稚ようちなりといふとも、みや

こへく具足そくし、天下の御目めにかけて、ふさ

きの大しんとかうし、藤原の棟とうりや

うたるへきよしを、こま宣くとのた

まへは、あ海女ま承人、うけたまはりて、よろ

こふ事はかきりなし。やかて、みやこへ

しし使者やをたて、まいぬしをめしくたし、

あたりのうらのふねをよせ、しゆたん

をもつていろとれるふたいをこそはり

たてけれ。十ちやうのはたほ立こ、百な

か立れたてならへ、かせにまかせてひる

かへせは、さうかい着はやかてじやうど

なる。ひたりみき左のかくやにかさりた

てたる大たいこ、まんまく太鼓をあけさ

せ、しゆれんにたまのすたれ朱をかけ、

はうさ宝座をさうにかさつて、うけん左右ち

とくの大徳そ僧うしやう、からり唐んをうち鈴ならし、  
上天てん界下竜かいのりうしん神をおとろかし

「（九ウ）」

しやうす請れば、八電大りうわうしゆ王らいし

て、せん兪き議ま南ち臨く備なりけり。なんせむ

ぶ部し洲う、ふさ房き崎のうら浦にして、ほう宝ざ座を

かさり、ちうしやう影ある。いさ聞や聴ら開いり風ん

やうかう議なりて、ちやうもん若せん干とせ

んきして、そこ若はく眷のけん風そくとも

を引ひ具きく出してこそ出いてられ既けれ。す

てにりうしん神いてたまへは、

国中のち稚こ兒たち、身を

かさり節ま設うけ

こゝを

先途

せんと舞ま給いた給まふ。

た天ゝ、てん

人  
にん人のこ人とく

なり。

「（一一オ）」

（第十四回）舞と管絃を見る竜王たち

「（一一ウ）」  
「（一二オ）」

去程 電神 衰熱  
 さるほどに、りうしん、五すい三ねつ、  
 たちまぢまぬかれたまひけるあい間  
 た、な<sup>阿</sup>に事もうちわすれ、まいに<sup>舞</sup>  
 みとれたまひて、ふさ<sup>房</sup>つきに日をそ<sup>崎</sup>  
<sup>見</sup>送<sup>送</sup>をくらるゝ。すはや、ひまこそよけれ  
 とて、あまも、いて<sup>出</sup>たちをそかまへける。  
 五しきのあやをもつて身をまとひ、  
<sup>色</sup>夜くはうのたまをひたいにあて、かね<sup>鉄</sup>  
 よきかたなわきはさみ、ぬのつなは  
 はしをこしにつけ、なみまをわけ<sup>波</sup>  
 てつつといり、た<sup>入</sup>いなんしの身な<sup>男</sup>  
 りとも、一人うみにいらん事、とくの<sup>子</sup>  
<sup>魚</sup>うを、りう、かめ、大しやのをそれもあ<sup>恐</sup>る  
 へきに、申さんや、をんなの身と<sup>女</sup>  
<sup>有</sup>ありて、一人うみへいる事は、たくひす<sup>少</sup>  
 くなき心かな。すせん万里の<sup>千</sup>かい<sup>海</sup>  
<sup>路</sup>ろをすぎ、りうくうのみやこにつく。  
<sup>夜</sup>やくはうのたまにて<sup>照</sup>らされて、くら<sup>暗</sup>  
 き所はなかりけり。ことさらみ<sup>見</sup>をきた<sup>置</sup>

「(一二ウ)

りし事なれば、まよふへきにて<sup>候</sup>  
 さらわす。りうくうのはうてんにあ<sup>崇</sup>  
 めをくすいしやうの玉、おもひのま<sup>思</sup>  
 にぬすみとりて、こしにつけたる<sup>付</sup>や<sup>約</sup>  
<sup>東</sup>くそくのぬのつなをひ<sup>引</sup>けは、せんち<sup>船</sup>  
 うの人々、あはや、やくそくこゝなり<sup>東</sup>  
 と、手てにつなをくりあくる。あまも<sup>海</sup>  
 いさみてかつ<sup>潜</sup>けは、うへよりいとひ<sup>引</sup>き  
 けり。いまはかうとみえしと<sup>見</sup>ころに、  
 たまをまほれるせうりう、此よしを<sup>由</sup>  
<sup>玉</sup>みつけ、あともとめておふ事は、た<sup>追</sup>  
<sup>見</sup>みつはのそやを<sup>求</sup>いることく、せんち<sup>船</sup>  
 の人々、あはや、ほのかにみゆるは。くり<sup>線</sup>  
 あけよ、と<sup>下</sup>けちするに、あまの<sup>海</sup>あと<sup>跡</sup>  
 について、ひとつの大しや、をふて<sup>追</sup>  
<sup>来</sup>くる。たけは十ちやうはかりにて、ひ<sup>曙</sup>  
<sup>剣</sup>れにつるきはさ<sup>扶</sup>み<sup>立</sup>たて、まなこは、  
 たゝ夕日のみつにうつろふことくな<sup>舌</sup>  
 り。くれなぬのことくなるしたのさ<sup>先</sup>き

「(一三ウ)

「(一三ウ)

をふりたて、<sup>振立</sup>すきまなくをつかくる。

あま、<sup>海女</sup>かなはしとおもひけるあひた、

かなたをぬいて<sup>抜</sup>ふせきけり。せん

ちうの人々、<sup>中</sup>此よしを御らんし、手

をあかき、<sup>抱</sup>身をいたき、<sup>追</sup>おつつ、<sup>臥</sup>ふいつ、<sup>転</sup>こ

ろんつ、あはやくとおほせけり。かま

たり御らんし、<sup>足</sup>きよけんをぬき、<sup>御</sup>よう

ちのとき、<sup>稚</sup>きつねのあたへたひたる

一つのかまにとりそへ、<sup>兼</sup>とんていらんと

したまふを、<sup>給</sup>せんちうの

人々、<sup>弓</sup>ゆん手<sup>馬手</sup>めてにすかつて、

こはいかにとて、<sup>止</sup>とめけり。 ─ (一四ウ)

(第十五回) 船中の人々と小竜に追われる海女

すてにはや、<sup>網</sup>このつなのこりすくな

くみえしとき、<sup>見</sup>大しやはしりか、

つて、<sup>情</sup>なさけなくも、<sup>海女</sup>かのあまの二つ

のあしを<sup>足</sup>けちき<sup>食</sup>きは、<sup>水</sup>みつのあはと

─ (一五オ)

─ (二四オ)

そきへにける。むなしき<sup>空</sup>死<sup>引</sup>かいをひき

あけ、<sup>上</sup>しよに<sup>諸</sup>んのなかに<sup>中</sup>これを<sup>置</sup>をき、

一とに<sup>度</sup>わつと<sup>叫</sup>さけふ。か<sup>兼</sup>またり、<sup>足</sup>御ら

んして、<sup>取</sup>玉はとり得ぬものゆへに、

二世の<sup>機</sup>きゑんは<sup>尽</sup>つきはてぬ。むねの

あひたに<sup>問</sup>きざ<sup>傷</sup>あり。大しやのさける

のみならずと、<sup>怪</sup>あやしめ<sup>驚</sup>御らんあり

ければ、<sup>傷</sup>此きすのなかよりも、<sup>水</sup>すいし

やうの玉<sup>出</sup>いて<sup>追</sup>させ給ふ。さては、<sup>見</sup>大しや

のおつか<sup>駆</sup>けしとき、<sup>刀</sup>かたなを<sup>振</sup>ふる<sup>玉</sup>とみ

えしは、<sup>防</sup>ふせかん<sup>我</sup>ためになくして、<sup>害</sup>たま

をかくさん<sup>隠</sup>そのために、<sup>我</sup>わか身<sup>我</sup>をかいし

けるかとよ。せめて<sup>傷</sup>此きすを、<sup>我</sup>わか

身<sup>少</sup>すこし<sup>負</sup>おいたらは、<sup>有</sup>かほとにもは

おもふ<sup>思</sup>ま<sup>女</sup>しきを。をんなは<sup>有</sup>はかなきあ

り<sup>疎</sup>さまかな。おとこの<sup>命</sup>めい<sup>背</sup>をそむかし

とて、<sup>命</sup>いのち<sup>捨</sup>をすつるは<sup>命</sup>かなさよ。とも

し<sup>消</sup>火<sup>夜</sup>に<sup>虫</sup>きゆるよるのむしは、<sup>夫</sup>つまゆ

へ<sup>焦</sup>その身<sup>寄</sup>をこかすなり。ふえ<sup>寄</sup>による

─ (一六オ)

─ (二五ウ)

あきのしかは、はかなきちきりに

いのちをうしなふ。それは、みなく、し

うあいれんほのわりなきちきりと

はいひなから、かゝるあはれはまれ

なるへし。われには二世のきゑんなれ

は、又こん世にもあいみなん。なんちは

いまこそかきりなれ。わかれのすかた

をよくみよとて、いとけなきわか君

を、しかいにおしそへたりければ、し

たるおやとしらぬ子の、此ほとは

しさに、むなしきちふさをふくみ

つゝ、はのむねをたゝくを

みて、上下はんみん

おしなへて

みなくなみたをそ、

なかしける。

あまはむなく成たれと、かしこ

きせんけうはうへんにより、りうくう

┌ (一七オ)

かいへむははれしむけほうしゆを、こ

とゆへなくむはい返したまふ事、

ありかたしともなかくに申をよ

はさりけり。この玉は、すなはち、をく

りふみにまかせて、こうふくしの本

そん、しやかほとけのみけんにゑり

はめたまひけるとかや。しやうじん

のれいさう、しやくせんたんのみそ

きにて、五すんのしやかをつくり、にく

しきの御しやりを御しんにつくり

こめなから、方八すんのすいしやうの

たうのなかにおさめ、むけほうしゆと

名つけ、三国一のとうはう、りう王

のをしみ給ひし、ことはりところ、き

┌ (一八オ)



〈注〉

（二才）はくちよ……「白女」で海女の意。海人の意の「白水郎」による連想か。

（三ウ）ひとつのかしらをさきとして……文意不明。

（四才）れいか……美しい川。

（四ウ）まんしゆ……海に投げ入れると潮が満ちる靈力があるという玉。

（五才）しやかつらりうわうはしめとして、わしきりうにいたるまで……八大竜王の面々。

（五ウ）いねうかつかう……周囲をめぐって深く信仰礼拝すること

（七ウ）五すいさんねつ……五衰は、天人が死ぬ前に現われるという五種の衰相。三熱は畜生道で龍・蛇などが受けるとされる三つの苦しみ。

（八才）かくや……雅楽で、楽人の演奏する場所。

（八才）みきり……そのとき。

（九才）たらちう……本来は親をさす「たらちね」の転か。

（九ウ）けうやう……死者の後世を弔うこと。

（九ウ）天下……国を支配する者。

（九ウ）ふきゝきの大しん……歴史上の人物としての藤原房前（天武十年～天平九年）は、藤原不比等の第二子で藤原北家の祖。

（一〇ウ）なんせむぶしう……閻浮提。須弥四洲の一つ。須弥山の南方海上にある大陸。もとインドの地を想定したもので、のち人間世界・現世を意味するようになった。

（一〇ウ）ちうしやう……「招請」の誤りか。

（二四ウ）おつつ、ふいつ、ころんつ……追ひつ、臥しつ、転びつ」の音便形。

（二四ウ）ようちのとき、きつねのあたへたひたる一つのかま……鎌足が生まれた際に白狐（茶杓尼天）が鎌を与えたので鎌足と称したという伝承がある。

（二七ウ）しやうじんのれいさう……釈迦の姿を生き写しにした像。

（二七ウ）一八才）みそき……神仏の像を造るのに用いる木材。

（二八才）しやり……釈迦の遺骨、仏舍利。

(一八才) むけはうしゆ……無<sup>げ</sup>価とは値段が付けられないほど高価なこと。『法華経』「五百弟子授記品」に説く「衣<sup>え</sup>裏の宝珠の喩え」(仏に結縁する仏種を懐きながらそれに気付かない愚かさの喩え)の無価宝珠に由来する名称。

〈校異〉

(一ウ) りうくうかいにーりうくうかいへ (卷子本)

(寛永版)

(四ウ) ー(五才) かけかけーかけ (卷子本) (寛永

版)

(五才) はしめとしてーはしめとし (寛永版)

(六才) みらいにー未来て (卷子本) (寛永版)

(八ウ) かみほとけのそみー神ほとけのかみ (卷子本)

(八ウ) 八大りうくうー八大りうわう (卷子本) (寛永

版)

(八ウ) ぬすみとつてやああたへかしーぬすみとつて

やあたへかし (卷子本) (寛永版)

(一〇ウ) そこはくのーそこはこの (卷子本) (寛永

版)

(二三才) やくはうのたまー夜光のたま (卷子本)・夜

光のさま (寛永版)

(一四ウ) かなたをーかたなを (卷子本) (寛永版)

(一六才) なくしてーなくし (卷子本) (寛永版)

(一七才) みなくなみたをーみななみたを (卷子本)

(一七ウ) まかせてーまかせ (卷子本) (寛永版)

(一八才) 給ひしー給ひしも (卷子本)

## あとかぎ

本冊の刊行をもって、『立正大学古書資料館蔵『大職冠』―影印と翻刻―』（全三冊）が完了します。本冊の内容は、令和三年度1期科目「書物の基礎2」履修者の学生諸君と授業中に進めた作業の成果を反映させたものです。昨年度以来のコロナ禍の影響で、当該授業はオンライン（教材配布型）での実施となりました。これまで経験したことのない環境下、手探りで進めた授業でしたが、お蔭様でこのような形にまとめることができました。

また、本書上巻刊行後に、小林健二編『絵解く 戦国の芸能と絵画 描かれた語り物の世界』（三弥井書店、令和2年3月）が刊行されました。同書所載の恋田知子「江戸前期の幸若舞曲絵巻・絵本の制作―「大職冠」と「敦盛」を例として―」には、本書収録の『大職冠』を取り上げて頂き、その伝本としての特徴や位置付けが分析されています。恋田先生には厚く御礼を申し上げますと共に、本書の読者の皆様には、是非、同書をご参照頂きたく存じます。

なお、本書上巻にも記しましたが、翻刻と注を付す作業にあたっては、麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系59 舞の本』（岩波書店、平成6年7月）を参照させて頂きました。あらためて感謝を申し上げます。

最後になりますが、本書刊行にあたっては、立正大学図書館学術情報課、島田貴司氏、水上裕子氏、田中麻巳氏、小此木敏明氏に、種々ご高配をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

令和三年十二月吉日

伊藤 善隆

### 【編著者略歴】

伊藤 善隆（いとう よしたか）

昭和44年（1969）東京都生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。

早稲田大学文学部助手、湘北短期大学教授等を経て、現在、立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コース教授、博士（文学）。

著書：『初期林家林門の文学』（古典ライブラリー、2020）など。

### シリーズ・アタラクシア vol.6

立正大学古書資料館蔵 奈良絵本『大織冠』下巻  
—影印と翻刻—

---

令和4年2月25日初版発行

編著者 伊藤 善隆  
編集 立正大学品川図書館  
発行 立正大学図書館  
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16  
電話 03-3492-6615  
<https://www.ris.ac.jp/library/>

印刷・製本 株式会社イーフォー  
〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-7-11  
電話 03-3779-1140

発刊の辞

戦後まもない一九四九年、  
立正大学図書館年報「アタラクシア」創刊号が  
発刊された。

戦禍を潜り残された貴重な資料を手に、  
知の泉たらんとする大学の志は、  
図書館の場からも発せられた。

書庫の奥に何時もあり、

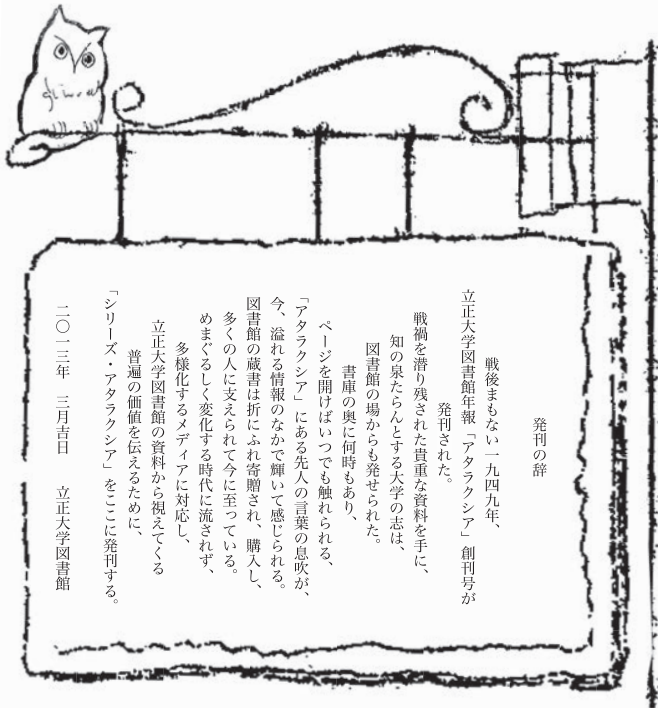
ページを開けばいつでも触れられる、  
「アタラクシア」にある先人の言葉の息吹が、  
今、溢れる情報のなかで輝いて感じられる。  
図書館の蔵書は折にふれ寄贈され、購入し、  
多くの人に支えられて今に至っている。  
めまぐるしく変化する時代に流されず、  
多様化するメディアに対応し、

立正大学図書館の資料から掘えてくる

普遍の価値を伝えるために、

「シリーズ・アタラクシア」をここに発刊する。

二〇一三年 三月吉日 立正大学図書館



立正大學圖書館

